

はじめに 「福岡市の新しいビジョンづくり」が始まりました！

「JIN-仁」という脳外科医の江戸時代へのタイムスリップのドラマが人気です。

今回の「福岡市の新しいビジョンづくり」は、25年前の総合計画策定時点へタイムスリップし現代と比較する作業と、25年後の福岡市へタイムスリップしその望ましい姿を考える取り組みです。福岡アジア都市研究所はこの福岡市の取り組みをサポートさせていただいています。

25年前—例えば、地下鉄空港線は博多駅が終点、地下鉄七隈線はなし、シーサイドももちは埋め立てが竣工したばかり、外環状道路や都市高速5号線もない状況でした。そんななか、アジアの成長にいち早く着目してアジアの交流拠点づくりを目指した取り組みが始まっていました。今では、都市交通基盤は概ね整備され、シーサイドももちは福岡市を象徴する空間に変貌し、アジアマンスが毎年開催され、アジア美術館が開館するなど福岡市はわが国の中でも最もエキサイトな都市として世界で取り上げられる都市としての評価を得ています。

さて、25年後はどのような都市へと変貌しているのでしょうか。この25年後の福岡市のあるべき姿を市民の皆さんとともに具体的に描き、市民共通の取り組みを進めていくための取り組みが「新VISIONアジアのリーダー都市ふくおかプロジェクト」です。この取り組みを進めるために、FACE BOOK、TWITTERを活用し、ワールドカフェやリレーフォーラムの開催などによる多くの市民の参加を目指したオープンな議論を進めるとともに、有識者の方々をはじめとするオピニオンリーダーの方々へのインタビューを行い、それらの意見を踏まえた「福岡市の新しいビジョン」づくりが進んでいきます。6月にスタートしたこの取り組みは、既にネット上で様々なご意見が飛び交っています。将来の福岡市の姿を構想するこの取り組みに皆さんも参加し、またその姿を実現するための担い手になってみませんか。

多くの皆さんの積極的な参加を期待しています。

(福岡アジア都市研究所 副理事長 松本 法雄)

今月のおすすめ

「コミュニティを問いなおす-つながり・都市・日本社会の未来-」ちくま新書800

広井良典著 292p 定価903円(税込) 2009年8月10日発行 ISBN978-4-480-06501-8

東日本大震災が起きた今なら特に、誰もがこれからの課題だと感じている「コミュニティ」のとらえかたについて、多面的に論じており、すっきりまとまった好著。本書では、コミュニティを「人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支え合い)の意識が働いているような集団」と定義し、少なくとも三つの側面からみるべきだと主張する。①「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」②「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」③「空間コミュニティ(地域コミュニティ)」と「時間コミュニティ(テーマコミュニティ)」という分類だ。

①は、都市化・産業化が進む以前の農村社会では、生産の場と生活の場は一致していたが、高度成長期に伴う急激な都市化・産業化により両者は分離し、新たな生産の場として「カイシャ」(会社)が台頭したという視点。②は、「同質性」(共同体に一体化する)を重視する農村型コミュニティと、「異質性」(独立した個人と個人のつながり)を重視する都市型コミュニティという、つながりのあり方に関する視点。③は(言葉としては分かりにくいですが、簡単に言うと)人間のライフサイクルを眺めたとき、子どもの時期と高齢期は地域への「土着性」が強いという特徴があり、少子高齢化が進む今後を考えると、地域との関わりが強い人々が増加する時代に入る、という視点。いずれも、戦後の高度経済成長を経て低成長時代に入った現在において、会社や家族といったコミュニティの中心にあった要素が多様化・流動化したため、人と人の間の孤立度が高まり、生きづらさや閉塞感を生みだしているという問題意識につながっている。

それでも筆者はコミュニティに望みを託し、これがどう創造的に変わっていけばいいのかを検討していく。都市や地域、ケアなど独特の視点から考察を深める各論は興味深いものだ。個人的には、コミュニティの中心(求心力)に今後何を置くか、という議論と、社会格差をなくすために「資産」に目を向けよう、という指摘が興味深かった。

前者は、特に欧米のように宗教が市民共通の原理として働かない日本においてはこれまで、学校や商店街がコミュニティの中心にあったが、今後は福祉・医療関連施設や自然、大学へと移っていくというもの。概念的には分かる気がする半面、自然は別としても、それらの施設にそうした認識があるのか、とも感じた。「やっぱり、これがあるからここに住んでいる」という認識を住民が共有するには、それなりの時間と信頼関係の醸成が必要だからだ。後者は、生きづらさとか閉塞感とも関連するが、人が将来の希望を捨てずに生きていくには、生まれたときからある格差(家の資産がなど)をできるだけ平等化し、誰でも努力すればいい結果が得られるという希望をもてる必要があると必要であり、そのための一つの試みとして、公共住宅を整備するなどの福祉政策を展開し、公正な富の分配を進めるべきだという提案で、公でしかできないことだけを公で、という考えをもっている私にとって新鮮なものだった。

もちろん、コミュニティの性格は地域によって違われ、課題も異なる。それでも、この本を読めば、どうしてコミュニティの復権がこれほど叫ばれているのか、そしてなぜ必要なかが分かると思う。これからの地方のあり方を考えていく上でも参考になる部分が多い。ぜひ一読を勧めたい。

(会社員・飯田 崇雄)

*ご希望の資料がございましたら ご連絡下さい。TEL:092-733-5707 FAX:092-733-5680 E-mail:library@urc.or.jp

その他の資料につきましては当研究所ホームページ内 (<http://www.urc.or.jp/>) の蔵書検索をご利用下さい。

* 利用案内/場所:福岡市役所北別館6F 開室:月曜日~金曜日 10:00~17:00*月末業務日はお休みです。

貸出:1人5冊まで 2週間以内(貸出には身分証明書が必要です。)

6月30日木曜日は休室です。

*福岡市役所1階の情報フラザで本が返せます。専用の返却ポストに入れてください。平日はもちろん、土・日・祝日も朝9時から夜8時までOK!

